
ショート・ショート

春菜

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ショート・ショート

【Nコード】

N4252B

【作者名】

春菜

【あらすじ】

一話完結のショートショート集です。一話、一話が別の話となっております。短いお話ばかりですので気軽に読みください。

狂気の想像

頭がおかしくなりそうだ。

夏弥は思った。

同じ国の言葉なのに自分に語りかけているその人が何を言っているのか

まったく理解できないでいるのだ。

初めは、ただ二人で話をしていた。

今からそう遠くないうちに起こる出来事が夏弥を不安にさせていることを

その人に伝えようと努力していたつもりだった。

正確にはその起こる出来事後、更に引き起こされるであろう問題に怯えていたのだが、その人には伝わらなかった。

些細なことに怯えている夏弥をその人は嘲笑った。

いつの間にか話が逸れ、そわそわと落ち着かないまま夏弥はその人の話を聞いた。

大したことではないとわかってはいた。

自分さえ、強くあれば何も問題など起こらない。

例え起こったとしても心がそこから動かなければ気にかけるほどのことではないのだと。

ただ、夏弥は自分の強さに自信がなかった。

きつと揺らいでしまうだろうと思った。

だが、その人はそれを責めた。

その人に責めたつもりはなかったことは知っていても、夏弥はそれに深く傷ついた。

だから責められていると思った。

狂ってしまったら。

いっそ、何もかもわからなくなってしまったらどうだろうか。

夏弥は静かに目を閉じた。そして想像した。

狂って、破壊の限りを尽くし、深紅に塗れた自分の姿。

それは自らのものか、それともその人のものなのか。

どちらにせよ、自分の心が無傷でいられるとは思えなかった。

「ヤダよ。」

夏弥は言った。

知る言葉の全てを尽くしてその人にもう一度、伝えようと思った。

その人は遮った。

そして大きな手を夏弥の目の前に広げ、言った。

「夏弥、もういいだろ。父さんと帰るぞ。」

音という快感

車から降りるときにチラリと見た行列。

先輩たちの創り出す芸術を見るために耳を真っ赤にしてまで並んでいる彼女たち。

僕を見るために来ているんじゃないのはわかってる。

でも、心では理解しきれないんだ。

僕は、先輩たちの描いた絵の中の1ピース。

ピエロのように踊って、歌って、喚くだけ。

幕の向こうから波のように押し寄せる熱気と歓声。

今更、胃が痛む。こうなることはあの日、名前を呼ばれたときから予想できた。

ステージを目前にして怪我をした彼の代わりにステージに上がってくれ、と

先輩に頭を下げられた。

「金を払ってまで来てくれてるんだ。記憶に焼き付くような舞台を見せてやりたいんだよ。」

僕の心の弱い部分を抉るような鋭い眼。断れなかった。

心をごっそり、先輩にもっていかれたようだ。僕は胸のあたりを掌で押さえた。

「何やってんだ？」

無意識にカーテンを握り、色が変わるほどに力の入ったコブシを体の後ろに隠した。

「緊張してんのか？」

先輩は僕が背中に隠していた掌を見つけ、そっと撫でほぐした。

僕が瞼を閉じ、俯いて頷くと

「大丈夫だ。誰も敵じゃない。」

そう言って優しく頭を撫でてくれた。まるで、小さい子供にするみたいに。

「ちゃんと練習してきたじゃないか。何が不安だ？」

確かに、先輩に頼まれたあの日から僕は練習を重ねてきた。

CDを何度も聞いて、先輩たちの動きを録画し、繰り返し見て、そして動いた。

寝ていても踊れる。

それほどの自信が湧いてくるように、何度も、何度も繰り返しした。でも実際、そんなものは欠片も感じられない。

僕がしたのはただ歌と踊りを頭に入れただけだ。

気がつくとステージ上で曲のカウントが始まっていた。

「ビビってんじゃないぞ？」

そう言って、先輩は僕の背中を力いっぱい叩くと先に出て行ってしまった。

背中に強く残る手の形をした痛み。それが足を前へ進める勇気をくれた。

歓声が一際大きくなる。

目が眩むほどのライトが全てを照らし出す。

この湧き上がるものは何だ？空を飛べるほどの高揚感は？

スピーカーが増幅した音は爪先から全身を駆け巡り渦を巻く。

最初の一音がその渦に火を点け、声は爆発した。

これは、快感だ。

ニセモノ（前書き）

想像するところがちょっと怖い話ですが、極力、そういう表現は控えてあります。

ニセモノ

僕の中に”いる”ものが何なのか、確かめてみようと思った。何がこの掌を流れていて、どうやってこの指を温めているのか。ただ確かめてみたかっただけなんだ。

でも、出てきたのは赤いだけの液体。

がっかりだ。こんなものが僕を生かしていたなんて。もっと違うものを求めているのに。

神様、僕を動かすのは本当にこんなものなんですか？

たったこれだけで僕は生かされているのですか？

ねえ、神様。人間なんて、こんなつまらないものだったのでしょか？

裂け目から流れる温かい液体は流れる時とともに冷たく固まって、動かなくなった。

二日後。僕が確かに切った傷口は濃い赤から紫に変色していた。

一週間もするとそれは塞がるどころか広がっているように見えた。

脈動する手首から、じわり、じわりと滲み出てくる液体に僕はワクワクした。

やっぱり、”あれ”だけが僕を動かしているんじゃないかった。

そう思うだけで嬉しくなった。

それから段々と薄い膜ができて、その中に何かが生きている気がした。

ある日、パチンと弾けた膜の中から白い管のようなものが生えてき

た時、

僕はゾツとした。

身震いする体を抑えつけるので精一杯だった。

一日ごとに外に這い出してくる細く長いもの。

生えてきたのは根だった。

体の中を、外を。乾いた白い根っこが伸びていく。

初めは服に全て収められる程度だったが、根は足へ、首へと伸びて
いつて

やがて僕は僕から生えてきた”それ”に全身を覆われるまでになり、
繭のように暖かいその中で眠るように目を閉じた。

白く暖かいその中で、僕は意識を手放した。

僕が望んだものとは違ったけれど、確かにそれは僕を生かすものだ
った。

そして僕を殺してしまうものになり、僕はいなくなる。

いつかこの根はまた「僕」を作り出すのだろうか。

僕は、その先を知らない。

ニセモノ（後書き）

よろしければ評価をお願いします。

監禁（前書き）

読んでいただけて嬉しいです。ありがとうございます。

監禁

眠らされ、目を覚ましたとき、白い部屋に私はいた。

ベッドも、壁も、ドアも全てが白く塗られている。

自分を覆っているシーツに血液がついていることに気付いた。

怪我をしていない。自分のものではない。でも、他には誰も居なかった。

「誰かいらないの？」

心細くて声を出した。声はただ、部屋に響いただけだった。

手首がズキンと痛んだ。眠らされた時、強く抵抗したから痣になっている。

突然、恐怖が襲ってきた。

震えが止まらなくなつて歯がガチガチと鳴った。

ドアに駆け寄ったがドアは頑丈で重く、ピクリとも動かなかった。

誰かが鍵を閉めたのかもしれない。

何度も殴るようにドアを叩いて、助けを求めて叫んだ。

声は掠れて、喉は乾き、呼吸さえ拒むように痛むほど助けを呼んだ。

だが、何も返ってはこなかった。人の声、物音さえも。

窓もない部屋。外を窺うこともできずにベッドの上でじっと膝を抱えた。

長い時間、何も食べていないはずなのに空腹にはならなかった。

堅い扉を叩き続けて腫れた手の痛みだけが、生きていることを自分に教えてくれた。

そして座ったまま眠った。

昼か夜かもわからないその場所で、恐怖と痛みが去るのを待っていた。

シーツに包まれて、その場所から少しも動かないまま目を閉じていた。

何も変わることがない恐怖感。それから逃れるために自分で噛んだ

傷が痛んだ。

空腹は、少しだけ感じるようになっていた。

水もなく、食べられそうなものなど何もないこの部屋では意味がないことだったが、

それだけでも生きているのだと感じられた。

時々、顔を上げて一度も開くことのないドアを睨んだ。

身じろぎをしようとする体を抑えるように両腕で抱きかかえた。

そして眠った。深く、深く。

何も聞こえないように、何も感じないくらいに深く眠った。

光を浴びて

苦しかった。でもそれ以上に逃げ出したくてたまらなかった。だから走っていた。怖くて、苦しくて、でも走り続けた。この恐怖から逃げるためにひたすら前を向いていた。

うしろから追ってきたものが呼んでいる。その声に振り向きたくない。

振り向けば、もう自分には戻れないことを知っている。

立ち止まって捕まったら終わりだということはわかっている。

走って走って、走り続けて、どこまで行けば安心して立ち止まれるのだろうか？

そんな疑問がふわりと体を包んで、足が重くなる。

何を目指してどこへ行けばいいのか、いつの間にかわからなくなっている自分に気付く。

ただ一つだけ頭の中に残っている「逃げろ！！」と叫ぶ警告音。

それが響いて思考をかき乱し、不安を募らせる。

クラクラする頭。歪んだ視界から目を背けて前へと足を踏み出した。喉の奥へ恐怖を押し込む。カラカラに乾いた喉が、吐きそうなほど熱を持った。

苦しい！もう走れない。

それなのに、どうして止まってはいけないんだ？

この苦しみから逃れるためには、何を失ったってかまわないのに！

ズタズタに傷ついた足が赤い足跡を残し、それを背後から追う奴らが嘲る。

「どうして追いかけてくるんだ！」

そう叫んでも意味はない。奴らの乾いた笑い声がこだまする。逃げたって追いかけてくる。どこにも安心していられる場所なんか

ない。

誰もここにはいない。誰も助けてはくれない。

背中を押してくれるような誰かは、もうどこにもいない。

誰もが、何もできずに逃げ回るこの姿をわらっているだけだ。

もう終わらせよう。

逃げるだけだったこのときを。

そして始める。

追う者に立ち向かい、戦うときを。

光を浴びて立ち止まれる瞬間が来るまで。

光を浴びて（後書き）

とりあえずこれで一区切りということにさせていただきます。ありがとうございます。

至福の瞬間

振る。心地よい音が聞こえてくる。

ハサミを手に袋の口を切る。辺りに香りが広がっていく。

漂う優しさに、深呼吸。

たっぷりその空気を吸って、ゆっくりと吐き出す。

美しい香りが体の中に入ったまま、消えてしまわないように。

甘くて、香ばしい。

血管を巡って脳の真ん中まで全身が香りに満たされたところで、袋の中にスプーンを入れる。

カサカサと中身が揺れる。

一匙を白磁のポットに入れ、沸かしておいたお湯を注ぐ。

蓋をして、砂時計をくるりと半回転。

青い砂が一本の線となり、落下していく様子を眺めながらポットの中で開く茶葉を想像する。

くるくるまわる茶色の葉。

のんびりあくびをするように開いて、お湯を染めていく。

透き通るオレンジ色へと変わるポットの中。

最後の砂が一粒、コロコロとガラスの坂道を転がり落ちた。

水平に円を描くようにゆったりとポットを回して、すーっと下ろしていく。

わずかなすき間から温かい香りが漏れ出す。

茶漉しの上から真っ白なカップに向かってポットを傾けると、オレンジ色の水が流れ込む。

銀の網の隙間から雫が溢れ、集まってカップの中へ飛び込んだ。

椅子にくつろぎながら、まだ湯気の立つ紅葉色にそっと息を吹きか

ける。

唇から体内へ注がれると

冬へ向かう秋の昼下がりの太陽に似た香りに癒され、清々しい口あたりになり心が和んでいった。

他に何を失うことになろうとも

このときだけが、存在すればいい。

これが私の至福なのだ。

ツバメの墓

ツバメが死んでいた。

道の上で、羽を休めるように静かに、傷一つないまま横たわっていた。

ときどき風に吹かれて尾や羽根が揺れた。

手で掬い上げれば、その瞬間に小さな翼を広げて空を飛びそうに見えた。

でもツバメは動かなかった。

その目を開くことも、嘴を動かして囀ることも、宙を舞って虫を捕らえることもできないのだ。

自分の姿に重なって見えた。

痛みを乗り越え、勇気に行うことができない。

それなのに大声で傷ついたと叫んで泣くこともできない。

動けないでいる。この場所からずっと。

立ち上がることもせずに、膝を抱えてじっと前だけを見つめている。

あのツバメのように、誰にも見守られることなく

悲しみに弔われることもなく

一人ぼっちで。

私は爪に土が食い込むほど強く地面を掻き

小さな穴を掘った。

すっかり冷えて、硬くなったツバメを汚れた手でそっと包んだ。

柔らかい羽毛を指先で少し撫で、穴の中に置いた。

土をかけて、埋めた。

小さな墓がそこに現れた。

ツバメのためにしたわけじゃない。

死んだことにも気付かれず、ただ一人ぼっちで道に横たわるツバメにも

体を撫で、墓を作ってくれた誰かがいたように

悲しみに気付いてもらえず

誰にも傍にいてもらえない私に誰かが手を差し延べてくれたらこの頬を撫でってくれる人が現れてくれたら。

そんな微かな望みを

この小さな墓に込めて

ツバメよ、安らかに。

私は静かに両手を合わせた。

迷う指

たった一言を書いては消し。

些細な質問をするために、私は何時間もその動作を繰り返す。

同じ言葉を書いては消し。違う言葉を選んでは消し。

返ってくる答えなんて大体想像がついている。なのに、敢えて聞くことを選んだ。

そのはずなのに、最後のボタンにかけた指は今また躊躇う。

答えがなかったらどうしよう。

どうしてそんなことを聞くのかと不審に思われたらどうしよう。

不審に思って答えてもらえなかったらどうしよう。

思考を巡らせれば巡るほど、いつそ考えるのをやめてしまえたらと思うほどに怖くて不安でたまらない。

他の人ならば簡単に聞けるだろう。そこら辺を歩く見知らぬ人にも聞けること。

それを躊躇うのは相手が君だからか。

口を開いてはまた閉じ、名前を呼んでは「何でもない」と首を振るように

最後の一つ、このボタンを押す勇気が出てこない。

同じ文字を点けたり、消したりさせて、迷う私を君は知らない。

どうしてそんなことをするのかと聞かれれば、それは紛れもない、恋の力である。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4252b/>

ショート・ショート

2011年10月3日11時17分発行